

レプトスピラ症

発生

ワイル病、秋疫などと呼ばれる人畜共通感染症である。レプトスピラ (*Leptospira*) は、スピロヘータ目レプトスピラ科に属するグラム陰性細菌で血清型には icterohaemorrhagiae, grippityphosa, pomona, canicola, javanica, hebdomadis, pyrogenes, automnalis, australis, tarassovi など多数ある。

レプトスピラは保菌動物の腎臓に保菌され、尿中に排菌される。保菌動物として、げっ歯類をはじめ多くの野生動物や家畜（ウシ、ウマ、ブタなど）、ペット（イヌ、ネコなど）が挙げられている。

ヒトは、この保菌動物の尿で汚染された水や土壌、あるいは尿との直接的な接触によって経皮的に感染する。また、汚染された水や食物の飲食による経口感染の報告もある。幾つかの症例ではネズミの咬傷、感染動物と接触する職業で、直接人間に感染するが、殆どはレプトスピラの保有動物の尿によって汚染された水を浴びたり、仕事で使って、間接的に感染する。

症状

典型例

再発性の熱性黄疸が主体。レプトスピラ血清型としては、icterohaemorrhagiae 型（あらゆる気候下で見られる）の他いくつかの血清型が挙げられる。

6-12 日の潜伏期の後、広範な感染症候群とびまん性の疼痛（関節痛、筋肉痛） 髄膜症状、結膜充血で発病する。

第 5 - 7 病日に黄疸は出現し、その間当初の感染症候群は減弱する。黄疸と合併して、髄膜炎（臨床症状と検査所見）、腎障害（乏尿、蛋白尿、尿円柱、高窒素血症）、出血傾向、多核白血球優位の白血球増多症を認める。

第 10 病日に中間期が始まり、解熱と黄疸の軽減が見られる。

第 15 病日に発熱が再び起こり、髄膜と腎症状も併発することが多いが、黄疸は再燃しない。

第 20 病日に解熱する。回復期は長いが、肝と腎に後遺症は残さない。

抗生剤投与により、熱発の再燃は抑えられ、合併症の危険が減る。

重症型

殆ど全例の血清型が icterohaemorrhagiae 型で、特に極東地域で多い。肝障害は稀。

第 5 病日に無尿または利尿がある急性腎不全が発症することがある。広範な出血性症候群がしばしば起こり、紫斑、消化管出血を見る。

昏睡、痙攣、虚脱（心筋病変または自律神経障害に因る）があれば、予後不良である。

解離型

軽症のもので、ある地域の変異血清型がある年に流行して起こることが多い。誤診されやすく、非肝性黄疸、無菌性髄膜炎、腎不全、感冒様症状、腸チフス様と診断される。出血傾向や眼症状（ぶどう膜炎）が単発することは非常に稀である。

国内での発生

2005 年 ペット取り扱い業者の従業員が発熱、血尿、急性腎不全、肝機能障害で入院。レプトスピラ症と判明。感染源はアメリカから輸入したモモンガであった。

なお、2005 年 9 月 1 日より全ての哺乳動物と鳥類は輸出国政府の衛生証明書（レプトスピラ症などに汚染されている恐れが無いことを証明したもの）を添付し、厚生労働省の検疫所に届け出ることが義務づけられた。

これらより

訓練・狩場での保菌動物（特にげっ歯類）・汚染環境（水辺）との接触
狩猟犬からの感染

から感染するリスクが高く、特に日本は重症型が多く注意が必要である。

他の感染症と異なり環境から皮膚を介して感染するた接汚染地域に直接皮膚が触れることの無いようにすることが重要である。